

「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵

バチカン図書館所蔵マレガ神父収集 豊後キリシタン文書群の魅力



平成26年11月1日（土）

午後1時30分～午後4時20分

会 場：臼杵市民会館 小ホール

主 催：マレガ・プロジェクト

人間文化研究機構 [国文学研究資料館・国立歴史民俗博物館]

東京大学史料編纂所

大分県立先哲史料館

バチカン図書館

共 催：大分県教育委員会

臼杵市教育委員会

後 援：キリシタン・南蛮文化交流協定協議会

[国東市・日出町・大分市・臼杵市・津久見市・竹田市]

プログラム

13:30 開会

主催者挨拶 ご挨拶

今西祐一郎（人間文化研究機構理事、国文学研究資料館長）

主催者挨拶 マレガ文書に残された日本のキリシタン関連史料

バチカン図書館と日本の研究機関との実り多きコラボレーション

チェーザレ・パシーニ（バチカン図書館長）

（通訳 國司航佑（京都大学））

「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵 歓迎の挨拶

中野五郎（臼杵市長）

13:50 趣旨説明

大友一雄（マレガ・プロジェクト代表、国文学研究資料館）

13:55 第Ⅰ報告 バチカン図書館所蔵マレガ文書について

デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ（バチカン図書館）

（通訳 國司航佑（京都大学））

14:50 第Ⅱ報告 マレガ神父収集文書群の魅力を保存し伝える－調査方法と進捗状況の紹介－

松井洋子（東京大学史料編纂所）

15:15-15:25 休憩

15:25 第Ⅲ報告 近世豊後のキリシタン禁制史料の発生システムと伝来

佐藤晃洋（大分県立先哲史料館）

15:55 フロア－を交えた意見交換

司会 シルヴィオ・ヴィータ（京都外国語大学）

久留島 浩（国立歴史民俗博物館）

16:20 閉会

挨拶 井口和起（元京都府立大学長）

目次

報告者紹介		1
ご挨拶	今西祐一郎	5
マレガ神父収集キリシタン関連史料 バチカン図書館と日本研究機関の実り多き取り組み	チェーザレ・パシーニ	7
“「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵”開催にあたって	野中信孝	10
「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵 歓迎のあいさつ	中野五郎	11
開催趣旨	大友一雄	12
第Ⅰ報告	バチカン図書館所蔵マレガ文書について デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ	13
第Ⅱ報告	マレガ神父収集文書群の魅力を保存し伝える ー調査方法と進捗状況の紹介ー	松井洋子 18
第Ⅲ報告	近世豊後のキリシタン禁制史料の発生システムと伝来	佐藤晃洋 23

報告者紹介

チェーザレ・パシーニ (Cesare Pasini)

経歴

1950年にミラノに生まれる。

1974年6月8日、司祭に叙階される。

1974年～1977年、ローマの the Pontificio Istituto Orientale (教皇庁立東方研究学院) で研究。1979年6月15日、東方教会学で博士号を授与される。

1978年～1989年、ミラノの神学校で教父学の教師

1986年～1991年、アンブロジアーナ図書館の Dottore incaricato (ドットーレ・インカリカトー)

1991年～2007年6月、アンブロジアーナ図書館の Dottore ドットーレ*

そのうち1995年11月から2007年6月まで、副館長

(*Dottore 博士 アンブロジアーナ図書館における、バチカン図書館の Scriptor にあたる称号)

2003年～2007年6月、聖アンブロジウス・アカデミアの所長

2007年6月25日～現在 バチカン図書館の館長

2012年12月2日、米国アイオワ州ダベンポートにある、聖アンブローズ大学の古典文学の名誉博士号を授与される。

その他、以下の研究機関の会員、委員を務める。

- ・ビザンチン研究のバチカン委員会の委員長 (2012年5月20日～現在)
- ・Accademia di sant' Ambrogio <聖アンブロジウス・アカデミー>2003年4月24日の創設以来
- ・Association International des Études Patristiques (AIÉP) <教父研究国際協会>
- ・Associazione Italiana di Studi Bizantini (AISB) <ビザンチン研究イタリア協会>
- ・Associazione Italiana per lo Studio dei Santi, dei Culti e dell' Agiografia (AISSCA) <聖人、崇拜、聖人伝研究イタリア協会>
- ・Comitato Scientifico del Centro Internazionale di Studi e Documentazione Pio XI di Desio<ピウス十一世研究及び記録収集国際センター科学委員会>

またバチカン図書館の館長の地位から、以下の機関の *perdurante munere* (名誉永久) メンバーでもある。

- ・The Pontifical Committee of Historical Sciences <教皇庁歴史学委員会>
- ・The Pontifical Academy of Science <教皇庁科学アカデミー>
- ・The Board of Directors of the Vatican School of Paleography and Archives <古文書学とアーカイブズのバチカン・スクールの理事会>
- ・Consiglio della Fondazione Camillo Caetani di Sermoneta <セルモネータのカミロ・カエタニ財団評議員会>

研究分野・関心領域

ビザンチンの聖人伝研究、古典ギリシア語古文書学、ミラノのアンブロジアーナ図書館およびバチカン市国のバチカン図書館の歴史、ミラノの聖アンブロジウス

主要業績

- Vita eusebiana (1981) <エウセビオスの生涯>
- Vita pseudoatanasiana (1999) <偽アタナシウスの生涯>
- di san Filippo d' Agira(1983) <アギラの聖フィリポについて>
- Vita premetafrastica di sant' Ambrogio di Milano (1983) <ミラノの聖アンブロジウスの前半生>
- the catalogue of Codici e frammenti greci dell' Ambrosiana (1997)
<アンブロジアーナ図書館所蔵古典ギリシア語のコデックスと断片の目録>
- Inventario agiografico dei manoscritti greci dell' Ambrosiana (2003)
<アンブロジアーナ図書館所蔵の古典ギリシア語写本の所蔵目録>
- Bibliografia dei manoscritti greci dell' Ambrosiana (2007)
<アンブロジアーナ図書館所蔵の古典ギリシア語写本の書誌>

デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ (Delio Vania Proverbio)

経歴

1962年生。ローマ大学（サピエンツァ校）セム語学卒業。

ナポリ東洋大学からアフリカ研究で博士号を授与される。

フィレンツェ大学で2年間の言語学の博士研究員。

1995年と96年、そして再度2000年から2001年、コプトのパピルスコレクションを包括的に調査するために、フィレンツェのパピルス学研究所に加わる。

教皇庁立ウルバニアーナ大学、教皇庁立東方研究学院、ウーディネ大学（5年間）で教鞭をとる。

2004年バチカン図書館のアシスタント研究員に任命される。

2011年6月24日、ベネディクト16世台下によってバチカン図書館東洋部門の Scriptor スクリプトル<書記官>に任命される。

関心領域

トルコ語学、トルコ古語音韻論、アルタイ語学、初期オスマン・トルコ文学と言語、トルファン文書、トルコ文学、グラフィオタクティクス、カエドモン賛歌、賛美歌

主要業績

- La Recensione Etiopica Dell' omelia Pseudochrisostomica de Ficu Exarata Ed Il Suo Trefonds Orientale, 1998
- I "Füyüzât-ı mıkñâtısiyye" di İbrahim Müteferrika: per una revisione delle fonti [A revised examination of the European sources of İbrahim Müteferrika' s Füyüzât-ı Mıkñâtısiyye], in Turcica Vaticana, Città del Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, 2010 (Studi e testi, 461), pp. 161-196.
- 'İsà the Prophet: some Turkish anecdotes not found in the Arabic tradition. Part 1: The long-living worshipper
- 'İsà the Prophet: some Turkish anecdotes not found in the Arabic tradition. Part 2.1: Talking objects and animals. Part 2.2: Miscellaneous topics

今西 祐一郎（いまにし ゆういちろう）

人間文化研究機構理事 国文学研究資料館長 1946年生

専門分野 日本古典文学

研究内容 平安時代文学史の諸問題

主な研究業績

- ・『源氏物語覚書』岩波書店、1998年
- ・『蜻蛉日記覚書』岩波書店、2007年

大友 一雄（おおとも かずお）

国文学研究資料館教授・研究主幹 マレガ・プロジェクト代表 1955年生

専門分野 日本近世史

研究内容 近世日本における社会構造の研究、近世史料学の研究

主な研究業績

- ・『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館、1999年
- ・『江戸幕府と情報管理』臨川書店、2003年
- ・『幕府奏者番と情報管理』名著出版、2003年

シルヴィオ・ヴィータ（Silvio VITA）

京都外国語大学教授

元イタリア国立東方学研究所長

元ローマ大学 教授

専門分野 文化史学、東アジア宗教文化史

研究内容 近世・近代日本仏教史、日欧交流史

主な研究業績

- ・Buddhist Asia I, Italian School of East Asian Studies 2003年
- ・Buddhist Asia II, Italian School of East Asian Studies 2010年

松井 洋子（まつい ようこ）

東京大学史料編纂所教授 1957年生

専門分野 日本近世史

研究内容 近世の対外関係と長崎の地域社会

主な研究業績

- ・「ジェンダーから見る近世日本の対外関係」 荒野泰典他編『日本の対外関係6 近世的世界の成熟』吉川弘文館、2010年11月
- ・『ケンペルとシーボルト ―「鎖国」日本を語った異国人たち―』日本史リブレット 62 山川出版社、2010年9月
- ・「長崎出島と異国女性―「外国婦人の入国禁止」再考―」『史学雑誌』118 編2号、2009年2月

佐藤 晃洋 (さとう あきひろ)

大分県立先哲史料館 館長 1959年生

専門分野 日本近世史

研究内容 九州幕領における支配構造

主な研究業績

- ・『大分県の歴史散歩』編著、山川出版社、2008年
- ・『大分県史 近世篇Ⅳ』共著、大分県、1990年
- ・「豊後国直入郡幕領の庄屋」『九州史学』133号、2002年
- ・「日田郡幕領における中間支配機構－『御廻状留』にみる会所・筋代－」
大分大学教育学部『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』、1992年

久留島 浩 (くるしま ひろし)

国立歴史民俗博物館 館長 1954年生

専門分野 日本近世史・博物館学

研究内容 日本近世後期の地域社会の歴史的 성격についての研究、近世社会における儀式・儀礼・祭礼の研究、歴史系博物館の教育プログラムに関する研究

主な研究業績

- ・『近世幕領の行政と組合村』東京大学出版会、2002年
- ・「行列にみる近世の「異国人」認識」『国立民族学博物館調査報告』104号、2012年
- ・「「異文化」を展示すること・「自文化」を展示すること－歴博と大英博物館の「対外関係」の展示プランを比較して（歴史展示における「異文化」表象の基礎的研究）」『国立歴史民俗博物館研究報告』140号、2008年

ご挨拶

人間文化研究機構理事

今西 祐一郎

昭和初期に来日し、その後ご当地大分で主任司祭をつとめた、サレジオ会のマリオ・マレガ神父によって発見され、蒐集された豊後のキリシタン資料約一万点が、現在、バチカン図書館に収蔵されています。その資料が、中世末から近世にかけて日本におけるキリスト教の消長を解明する上でかけがえのないものであることは、すでにマレガ神父ご自身が日本滞在中に執筆し、戦後まもなくに出版された『豊後切支丹史料』（正・続）において実証されたところであります。

その貴重なキリシタン関連資料を、このたびバチカン図書館と私ども大学共同利用機関法人人間文化研究機構の共同事業として開始することになり、その一環として本日、バチカン図書館よりチェーザレ・パジーニ館長をお迎えして、マレガゆかりのここ臼杵市で、「バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力」というテーマのもとに、シンポジウムを開催できることは、誠に喜ばしい限りであります。

この計画は、はじめ、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ教授から、前京都府立大学学長、京都府立総合資料館長で現在国文学研究資料館の運営会議委員でもある井口和起先生を通じて、国文学研究資料館に照会がありました。国文学研究資料館では、この計画の重要性に鑑み、上部機関である大学共同利用機関法人人間文化研究機構に諮り、その結果、人間文化研究機構とバチカン図書館との間で本計画実施についての詳細な協定を締結し、その実施に当たっては国文学研究資料館だけでなく、機構内の国立歴史民俗博物館、機構外からは東京大学史料編纂所、それに加えて地元の大分県立先哲史料館の参加を得て、バチカン図書館所蔵マレガ文書の総合調査と研究が開始されることになりました。協定締結に際しご尽力賜ったパジーニ館長をはじめバチカン図書館当局に、あらためて御礼申し上げます。

さて、今さら申すまでもなく十六世紀末のキリスト教伝来は、日本文化にとって仏教伝来以来の大きな出来事でした。かつての仏教がそうであったように、キリスト教の伝来はその教義だけでなく、キリスト教をはぐくんだヨーロッパ文明の伝来でもありました。宣教師たちは、日本人にキリスト教の教義を説くだけでなく、みずから日本文化と日本語の理解のために膨大なエネルギーを費やしました。

十六世紀の後半、三十年余にわたって日本に滞在したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、現存する写本でおよそ 2500 頁、日本語訳の原稿用紙では 400 字詰原稿用紙約 6000 枚に及ぶ『日本史』を著して、私たち日本側の記録『信長公記』や『太閤記』からは知ることの出来ない信長や秀吉の言動を後世に残してくれました。そのフロイスの日本語訳『日本史』の 1000 頁以上は、ご当地豊後の記録に当てられているのです。

またイエズス会のロドリゲスは『日本文典』と呼ばれる日本語の文法書を著し、さらにイエズス会の宣教師たちによって、『日葡辞書』という日本語とポルトガル語の対訳辞書が作られました。それらは今日、日本語研究のための第一級資料として言語学者に利用されて

います。

宣教師たちによってローマ字で書き表された日本語の綴りは、中世の日本語の発音を知るための貴重な証言です。それによって、たとえば、私たちの一世代前の九州の人々の多くが「先生」を「シェンシェイ」と発音していた、その発音が少なくとも室町時代に遡る、歴史的に裏付けられる発音であることが分かるのです。『日葡辞書』をはじめとするキリシタンのローマ字出版物では、「せ」音は「SE」ではなく「XE」と書かれているからです。「XE」の発音は「シェ」です。宣教師たちはローマ字表記に際して、当時の日本人の発音を忠実にローマ字で写そうとしたのでしょう。

しかし、徳川幕府によるキリシタンの禁止は、キリスト教のみならず、そのようなヨーロッパ的な視点からの日本研究の前途を閉ざすことになりました。そして、キリシタンには過酷な弾圧と殉教が待っていました。その悲惨は言葉を尽くしても述べることは出来ないと思います。そうした中で、キリシタンの一部が、弾圧の網の目をかいくぐって、隠れキリシタンとして江戸時代 200 年以上を通して信仰を守り続けたことは広く知られています。

他方、キリスト教を捨てる者も、苦しみと無縁ではありませんでした。自身がカトリックの信者であった作家、遠藤周作は、1966 年に発表した小説『沈黙』において、棄教したイエズス会宣教師を主人公に据え、日本にとってキリスト教とは何かという問題を追求しました。キリスト教と日本および日本人の問題は、歴史の節目ごとに外来の文明や思想との出会いを繰り返してきた日本、その日本の文学の重要なテーマの一つであります。

このたび発足したマレガ文書についての、バチカン図書館と人間文化研究機構との共同プロジェクトが順調に進展し、学術に寄与する新知見が得られることを心から期待しております。

最後になりましたが、本日の有意義なシンポジウムの共催に多大なご尽力を賜った、大分県ならびに臼杵市の教育委員会、また後援を賜りました、キリシタン・南蛮文化交流協定協議会に御礼申し上げ、ご挨拶といたします。

マレガ神父収集キリシタン関連史料 バチカン図書館と日本研究機関の実り多き取り組み

チェーザレ・パシーニ

バチカン図書館のシスティーノ大広間(Salone Sistino)に描かれた、教皇シクストゥス 5 世の業績を記念する多くの図像の中に、大勢の人による長い行列の様子が見られます。これは 1585 年 5 月 1 日に行われた、新教皇によるラテラノ宮殿における 教皇就任式の豪華な行列の参加者たちの様子です。そしてその中に、馬に乗った 4 人の高官の姿が見られます。これは、ローマに訪れた最初の日本の使節団のメンバーです。彼らは、フランシス・ザビエルに代表されるイエズス会士が 1549 年に到達した土地、日本で誕生した、最初のキリスト教徒たちでした。彼らは、キリスト教に改宗した大名の代理の 4 人であり、ヨーロッパ、そしてローマにやって来た彼らの存在自体が、東アジアにおけるイエズス会のミッションの成果の証でした。彼らは、1585 年の 3 月 23 日に教皇グレゴリウス 13 世によって迎え入れられ、その年の 4 月 10 日にグレゴリウスの後を継いだシクストゥス 5 世は、彼らの帰路に際して、ローマ市民権を授けました。

自らの信仰を示すためローマ教皇のもとを訪れたことを誇りに思う日本最初のキリスト教徒たち——バチカン図書館において彼らの存在を伝えるものは、システィーノ大広間に描かれた使節団の図像にとどまりません。 図書館に保存されている古文書の中には、その



(Salone Sistino, affresco, 4 giapponesi della “prima ambasceria” in processione festosa verso Sisto V appena divenuto papa) 天正遣欧使節が描かれたラテラノ教会行幸図

人たちが教皇に手渡した書簡(Borg. Cin. 536)もあります。

そしてこの歴史的背景に、同じくパチカン図書館に保存されている、非常に重要なもうひとつの史料群を結びつけることができます。それこそ、サレジオ会神父マリオ・マレガの名前からつけられたマレガ文書です。

マリオ・マレガ(1902年、ゴリツィア近郊モッサ生まれ)は、1930年代初頭に日本にやってきました。はじめは宮崎や高鍋にて、若きサレジオ会士たちに哲学を教え、その後大分に移り、その地にて主任司祭として活動しました。1947年にはじめてイタリアに帰り、1949年に再び日本に戻ると、はじめは臼杵にて、そして最終的には東京目黒に移り、教区司祭となりました。その後1978年1月30日にブレッシャにてその生涯を閉じました。

マレガ神父は、大分の地において史料を1930年代から40年代にかけて収集し、1942年、1946年に日本で出版した『豊後切支丹史料』『続・豊後切支丹史料』の中で最初の史料群の整理・編成を行い、のちにその状態を維持してローマに送りました。史料は約10000点にのぼり、日本のキリスト教徒を襲った迫害に関するオリジナル史料です。実際、1590年に4人の若き使節団のメンバーが日本に帰国したときには、状況はそれまでの数十年にわたる前途有望な初期の段階から一変し、キリスト教にとって望ましくない方向へと進んでいました。当初は、ポルトガルからイエズス会士を、スペインからフランシスコ会士を受け入れつつ、両国との間で商業的にも利益を享受していたのですが、そうした状況は大きく変化していったのです。そして徳川家康(1543-1616)が将軍職につき、その後、幕府の禁教の意志が明確になっていったことで、キリスト教徒に対する徹底した厳格で過酷な弾圧の段階に入りました。これは、基本的には、江戸時代を通じて変わりありませんでした。この時代、キリスト教は秘密裏にのみ信仰を守ることができました。家族の中で受け継がれ、非常に長い潜伏期間の後、感動的な形で再び現れました。

このマレガ文書は、キリスト教徒の共同体に由来するものではなく、在地の行政機関からのもので、その大部分が臼杵(旧豊後)と竹田に関するものです。1593年まで臼杵と臼杵城は大友家の支配下にありました。キリスト教に改宗した大友義鎮(大友宗麟)の息子義統の改易後、臼杵は福原直高の手に渡り、太田一吉によって統治されました。そして最終的に1600年から1871年まで臼杵は大名稲葉家が藩主となりました。マレガ文書はまさにこの臼杵の稲葉家の居城に集められた「行政」文書です。

これらの文書の多様性を理解するには、当時の現状について具体的に触れなければなりません。まず、布教を禁止するだけでは、宣教師たちの情熱やキリスト教に改宗した民の熱意を食い止めることができず、キリスト教徒に棄教が強要されました。そして領主は、キリスト教徒でない証拠として、いずれかの寺院の檀那であることを証明する寺請証文を作成させました。そしてこれらの文書をもとに、大名の下で、「元キリスト教徒の記録簿」の作成が進められました。

さらにキリスト教を根絶するための方策として、定期的な絵踏(踏み絵)の実施が考案されました。これは十字架、もしくは聖画像を踏ませる儀式です。村人のみならず武士や僧侶などもその対象となりました。また、寺院は大名に元キリスト教徒、もしくは棄教者の死亡の際の届けも送ることになっていました。(その後も元キリスト教徒の家族、またはその一族は常に監視下におかれました。)

マレガ文書は基本的に、徳川家康の時代から1800年代後半までの棄教証明、寺請証文、

宗門改帳、踏み絵の証明、元キリスト教徒やその子孫の誕生や死亡記録によって構成されています。マレガ神父によって偶然にも発見されたこの史料群は、(一部ローマ教皇庁立サレジオ大学に保管されているものを除いて)今日バチカン図書館に保存されています。

これらの貴重な史料は、そのほとんどが、もともとの袋の中で保存状態も良好のまま保管されており、キリスト教を貫いた殉教者や、苦難に耐えることができず棄教した人々の歴史をわれわれに想起させます。日本のキリシタン研究のための唯一無二の貴重な史料であり、これほどまとまった形でのコレクションはこの分野の研究者にとっても類を見ないものです。マレガ文書を、各地に保存されているほかの文書史料や、キリスト教関連の遺跡・遺物とあわせて利用することで、細部に及ぶ歴史像を構築することを可能にさせるでしょう。そして、微妙なところを含め確かに検討に値する歴史の大切な一こまを明らかにすることへ一歩前進させてくれるはずです。

そしてまさにこのために、バチカン図書館と人間文化研究機構を中心とした日本の諸研究機関との間で、バチカンに保管されているマレガ文書の目録作成、保存、デジタル化、研究のためのコラボレーションが生まれました。バチカン図書館において、マレガ文書の重要性は、図書館の東洋部門責任者デリオ・プロヴェルビオ氏の熱意ある探究心のおかげで数年前に明らかにされました。そしてそれは、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ教授を始め、日本との様々な交流をもたらしました。さらに6年という期間で、国文学研究資料館(プロジェクト代表大友一雄教授が所属する)、国立歴史民俗博物館、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館との合同のもと行われるひとつのプロジェクトが誕生しました。

この場では、諸研究機関の名をただ列挙し、数名の名を挙げるだけでも、様々な領域の専門家と多くの方々の多大な尽力の上にこのような試みが成り立つことがわかるでしょう。そして、文化というものが、いかに実り豊かな相互理解と協力関係とに導いてくれるものなのか、改めて確認することになるでしょう。目標の場所にたどり着き、全員がその果実を享受することになると確信しております。

“「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵” 開催にあたって

大分県教育委員会教育長 野中 信孝

「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵の開催にあたり、大分県教育委員会を代表して、挨拶申し上げます。

皆様ご存じのように、バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書は、昭和4年（1929）に来日したイタリア人神父マリオ・マレガ氏（1902～1978）が「豊後キリシタン関係史料」の調査をする過程で収集した史料群と考えられています。マレガ氏は研究の成果を『豊後切支丹史料（正・続）』としてまとめていますが、収集した史料群は長く所在不明でした。しかし多くの皆様のご尽力により平成23年（2011）にバチカン図書館で発見されました。マレガ収集文書は約1万点と推計されており、『豊後切支丹史料（正・続）』に所収された史料も含まれていますが、大半が未公開の史料群です。これほどの規模のキリシタン関係史料群は国内でも確認されていないことから、多くの分野の研究に役立つことが期待されています。また、大分県内に残る古文書や遺跡・遺物などとともに研究することで、近世の人々の生活をより具体化できると考えています。

大分県教育委員会は、平成26年（2014）2月18日付けで大学共同利用機関法人人間文化研究機構と「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究」に関する協力協定を締結いたしました。この協力協定に基づき、大分県立先哲史料館がマレガ・プロジェクトに参加しています。

本シンポジウムでは、バチカン図書館のチェーザレ・パシーニ館長とデリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ東洋部門責任者をお招きしており、発見経緯や調査方法、今後の歴史的事実が発見される可能性などマレガ文書の魅力に迫ればと考えています。また、マレガ収集文書とともに、地域に残る古文書や遺跡等の豊後キリシタン関係史料の調査と活用について、皆様と活発に意見交換できると期待しています。

最後に、本シンポジウム開催に当たり多大なご支援・ご協力を賜りました皆様に感謝申し上げますとともに、ご参加いただきました皆様方にとりまして本シンポジウムが実り多きものとなりますよう祈念し、挨拶いたします。

「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵 歓迎のあいさつ

臼杵市長 中野 五郎

本日は臼杵市へお越し下さいまして、感謝申し上げます。

まずは、「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵が盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げますと共に、ここ臼杵市での開催を企画していただいた主催者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

本市は、国宝臼杵磨崖仏、臼杵城跡、二王座の歴史的町並み景観など、数多くの文化財を有しておりますが、近年では、市内野津町で発掘された下藤地区キリシタン墓地（大分県指定史跡）に代表される、キリシタン関係遺跡の話題も新たにクローズアップされてきております。

そのような中、今年の1月、マレガ神父が収集された膨大な量の史料が、パチカン図書館で発見されたというニュースが発表されましたが、その中に、数多くの臼杵藩関係の史料もあると伺いました。こうしたキリスト教にまつわる文化財の発見を聞くにつけ、キリスト教と深い関係がある臼杵の歴史に対する認識を新たにしています。

今年4月に、より多くの皆様に本市が所蔵する歴史資料をご覧いただくため、臼杵市歴史資料館を開館いたしました。その企画展示として、現在「キリシタンと臼杵」を開催しております。この展示では、大友宗麟時代にキリシタン文化が栄えた臼杵の地に吹き荒れた、江戸幕府によるキリシタン弾圧の“嵐”と、キリシタンの“苦難の歴史”に焦点を当てております。

マレガ神父収集史料の発見は、そうした江戸時代のキリシタンとその子孫の歩みを知る上で貴重な物証であり、関係する地元としましては、今後の研究の進展を心待ちにしているところであります。

約1万点とも言われる膨大な史料を調査研究するマレガ・プロジェクトはまだ始まったばかりと伺っております。今後、本プロジェクトが成功裏に進みますことを祈念しますとともに、その成果が得られた暁には、再び地元・臼杵に還元していただけるようなシンポジウムの開催ができればと期待しております。

本日は、大分県を代表する幻想的なイベント「うすき竹宵」の初日でもあります。約2万本の竹ぼんぼりと趣向をこらした32カ所の竹オブジェの灯りが、歴史ある臼杵の町並みを照らします。

キリシタンをめぐる歴史を学んだあとは、その舞台である臼杵のまちを十分ご堪能いただき、往時に思いをはせていただければ幸いです。

開催趣旨

”「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵” 「バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力」

大友 一雄（国文学研究資料館）

バチカン図書館において近世豊後地域のキリシタン関係文書約1万点が発見され、日本の研究機関とバチカン図書館が合同で調査研究を行う「マレガ・プロジェクト」がスタートしました。

活動は緒についたばかりですが、他に類を見ない多数の17世紀以来の禁教史料がどのように伝えられてきたのか、明らかにできた事実をバチカンでの調査の実際などとともに報告し、マレガ文書の魅力にせまることを、本シンポジウムの目的と致します。

さて、「どのように伝えられてきたのか」、いいかえれば、「何故、存在するのか」ということですが、この問題は、調査活動においても、大変重要と考えています。今後、コレクションを活用して様々な研究がなされることは間違いありませんが、その際にも基本的な情報となるでしょう。また、文書目録や画像データベースを構築などでも重要な問題であり、そこではより精緻な検討の必要が求められるでしょう。

「どのように伝えられてきたいのか」、このシンポジウムでは、次のような課題を立て、その事実関係の解明に努めます。第1は、プロヴェールビオ報告に関わりますが、「バチカン図書館に何故収蔵されたのか」という点です。従来、多くの研究者がこの文書群の所在を探索してきました。そうした経緯に鑑みても、この事実関係を明らかにしたプロヴェールビオ報告は大きな発見といえるでしょう。

第2は、このコレクションが、マリオ・マレガ神父の研究・保存への関心から収集された事実に関わります。バチカン図書館収蔵の事実関係とは別に、マレガ神父が「どのような文書を、どのように収集したのか」、「マレガ神父のもとでどのように管理されたのか」、この点が追求されねばなりません。松井報告は、マレガ収集文書の管理状況（ビニール袋確認）と、2年間の概要調査を通じて確認できた点を、活動の様子なども交えて報告します。伝来した文書群の、群ごとの伝来や構造を追求することが今後のいっそう重要になると考えられます。

第3は、マレガ神父が収集する以前、とくに江戸時代において「どのように伝えられてきたか」という課題です。佐藤報告はこの点について文書の内容なども精査し、村と藩の役割・機能を明らかにするなかで課題に迫ります。

第1・2の問題は、時代的には1930年代から40年代のことであり、イタリア語・日本語の資料が混在します。第3の問題は、古文書の世界です。

調査・研究は始まったばかりですが、成果・活動の一端を特に大分の皆さんに伝えるために、パシーニ図書館長、プロヴェールビオ専門研究員をお招きして、臼杵で開催することを決定いたしました。皆さんの積極的な参加をお願いいたします。また、日本とバチカンとの文化をめぐる「絆」がより確かなものになることを期待して、シンポジウムの趣旨説明とさせていただきます。

第 I 報告 バチカン図書館所蔵マレガ文書について

デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ (バチカン図書館)

バチカン図書館は、インド亜大陸、インドシナ半島、インドネシア諸島や北東アジアの諸地域を出所とする 17～18 世紀を中心とする古文書のコレクションを有しています。これらの地域に関係する主なものは次の通りです。

「バルベリーニ・オリエンターリ (Barberini orientali バルバーニ東洋文書)」(日本やトンキンからの文書を含む) は、17、18 世紀頃にバルベリーニ家によって設立された図書館が収集したもので、1902 年にバチカン図書館が入手しました。

プロパンガンダ・フィデ図書館 (Library of Propaganda Fide 布教聖図書館) からの「ボルジアニ・インディアニ (Borgiani indiani ボルジア・インド文書)」(71 点)、「ボルジアニ・シアメシ (Borgiani siamesi ボルジア・シヤム文書)」(2 点)、「ボルジアニ・トンチネシ (Borgiani tonchinesi ボルジア・トンキン文書)」(41 点)は、1627 年に設立されたコレジオ・ウルバーノ図書館 (the library of Collegio Urbano) に遡る起源があり、1902 年にバチカン図書館の収蔵となりました。

「バチカーニ・エストレモ・オリエンターリ (Vaticani estremo-orientali バチカン・東アジア文書)」(中国近隣諸国からの数々の文書を含む) は、バチカンが有する東アジア関係のなかでも最も古い文書を含んでおり、1922 年フランスの中国学者パウル・ペリオ (Paul Pelliot) の指導の下で形成されたものです。

「ヴァチカーニ・インディアニ (Vaticani indiani バチカン・インド文書)」(74 点)は、ほとんどが 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて受け入れた文書で、それ以前に図書館に届いていたいくつかの手書き文献も一緒にされました。「バチカーニ・インドシネシ (Vaticani indocinesi バチカン・インドネシア文書)」(1 点)は、最近の 2004 年に受け入れたものです。

これらの文字資料は、教会の歴史に関連するもの、土着の宗教の記述、文献、辞書など多岐にわたり、さまざまな言語と文字、すなわち、安南語、バタク語、ビルマ語、ヒンディー語、日本語、ジャワ語、クメール語、コンカニ語、韓国語、ラオス語、マラバル語、マレー語、マラヤーラム語、モンゴル語、ネパール語、ネワール語、パーリ語、プラークリット語、サンスクリット語、シヤム語、シンハラ (スリランカ) 語、タミル語、テルグ語、チベット語、ウルドゥー語などで記されます。紙に書かれるものが大半ですが、ヤシの葉に書いたものや金属板の上に刻まれたものも見られます。

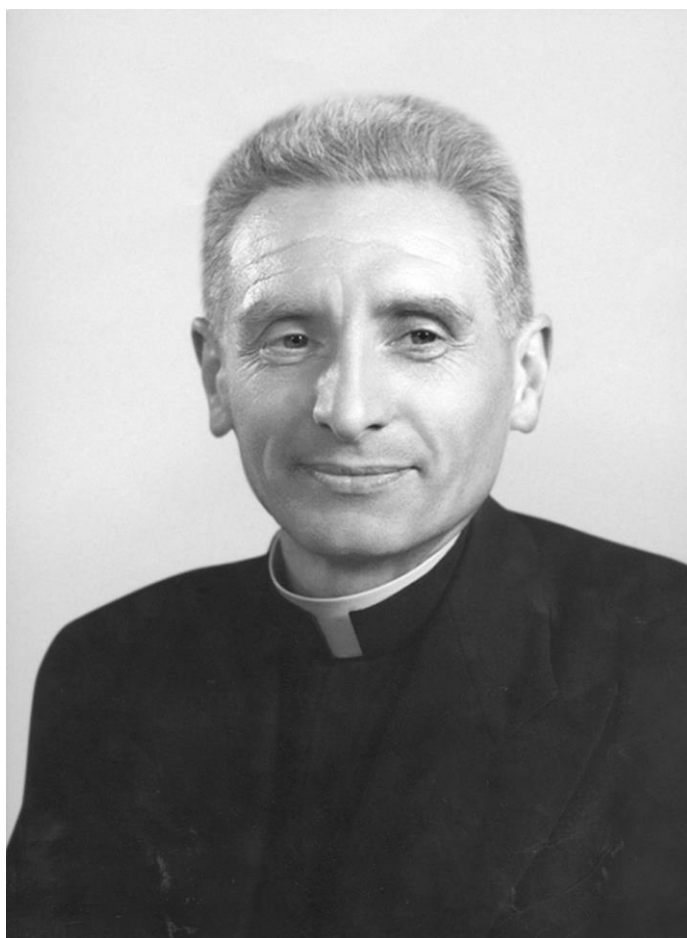
そして、サレジオ会宣教師マリオ・マレガが日本滞在中に収集し、第二次世界大戦中にローマに送った文書群は、17～19 世紀の切支丹関係文書が大半でありその数量は 10, 000 点に及ぶのです。

大名稲葉家の居城に保存されていた一群の史料について、簡略ながらも最初に紹介したのは、この史料を収集し、「マレガ・コレクション」と命名したゴリツィア出身のサレジオ会士マレガ神父自身でした。マレガ神父は、1939年、創刊されて間もない『モニュメンタ・ニッポニカ』という上智大学の雑誌に短い記事を発表し、それらの史料のいくつかの特徴を紹介したのです¹。また、コレクションの中の3点の史料については解説を行い、その内容を詳細に検討しています²。

同じく1939年、彼は『Annali Lateranensi』誌（布教・民族学博物館発行）の第3巻に発表した長編の論文において、8点の史料を解説し、その内容と歴史を紹介しています³。論文には史料が白黒写真で掲載されており、史料の現物はたとえば、マレガ神父によって1938年にローマに届けられていました。輸送の仲介をなしたのは、当時宮崎の使徒座知牧（Prefetto Apostolico）を務めていたヴィンチェンツォ・チマッティ

（Vincenzo Cimatti）猯下（1879-1965）です。また、それらの史料のあて先は、マレガ神父本人の述べたところによれば、布教・民族学博物館（Museo Missionario Etnologico）でした⁴。

さて、以上の8点の史料以外の、今日発見された史料群に関する最初の情報は、史料群の中から発見された『続・豊後切支丹史料』（1946年東京にて出版）第2巻の裏表紙のマレガ自身によるメモ書きです。そこには「オリジナル文書はすべ

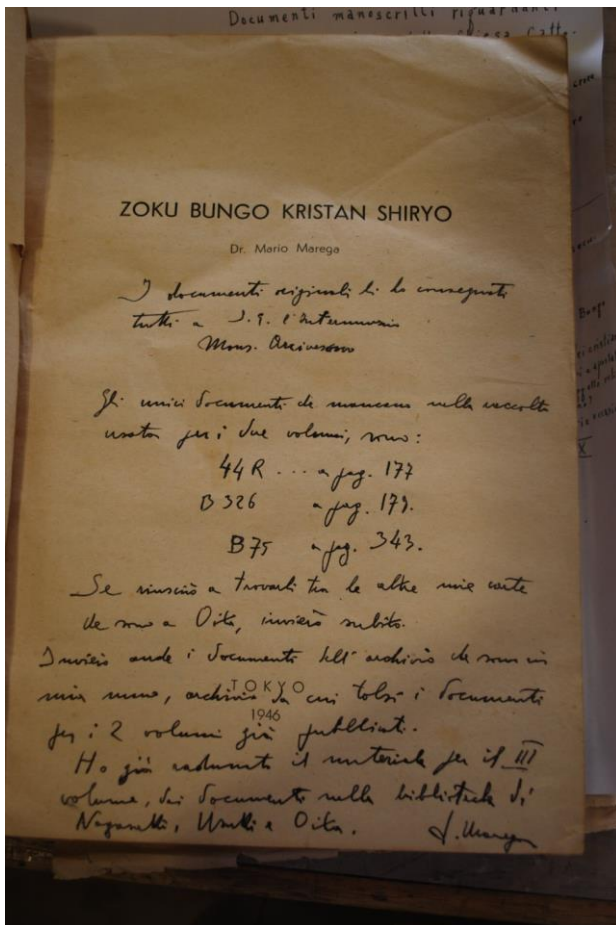


¹ M. Marega, *E-fumi*, «Monumenta Nipponica», 1939, 2/1, pp. 281-287 参照

² 史料 No. 99-T (写真つき)、320(写真つき)、105-T.

³ M. Marega, *Memorie cristiane della regione di Oita*, «Annali Lateranensi», 3, 1939, pp. 9-59 参照、史料 No. 288A、299、302、303、304、309、32-T.

⁴ Marega, *Memorie cristiane*, cit., p. 21: Id., *Documenti sulla storia della chiesa in Giappone. Gli editi di persecuzione del 1619. Testi e note critiche*, «Annali Lateranensi», 14, 1950, pp. 9.50, この中で、もうひとつの史料 No. 324 (地元のキリスト教徒迫害の布告、1613年)を布教・民族学博物館に寄贈したことを明示している(p. 17)。同様のメモはマレガ文書の中の特に史料 A9.2.18.1, A9.2.19.1 にも見られる。



て、教皇公使大司教猥下（S.E. l'Internunzio Mons. Arcivescovo）に渡しました」とあります。

1949年3月22日から教皇代理使節（福音宣教省の職員）を務め、1952年4月28日に教皇大使に任命されたのはマクシミリアン・ドオ・フルステヌベルグ（Maximilien de Furstenberg、1904-1988）という人物でしたが¹、1953年8月14日、この人物の命を受けた教皇公使秘書ジェームズ・R・ノックス（James R. Knox）は、東京にあつて報告を認めました。そしてその報告の宛先は、のちの教皇パウルス6世、当時国務長官代理を務めていたジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーニ Giovanni Battista Montini 猥下でした。そこには以下のように書かれていました。

「猥下。サレジオ会の宣教師マレガ神父は、日本における初期キリスト教徒の迫害に関する公的史料のコレクションを蒐集し、そのすべてをバチカン図書館に寄贈していただくべく、教皇聖下に謹呈する心積もりです。東京のイタリア大使の温かいご助力により²、教皇公使猥下は、ジェノヴァー横浜間に新たに開通した航路の最初の船舶に載せて、上掲の文書とその他何冊かの書籍を輸送することができました。猥下に宛てられたのは、二つの大きな箱と一つの中くらい箱です。

- 1) 簡単な作りの木製の大箱には、既に目録作成の済んだ文書が入っています。目録番号は専用のノートに記載されています。
- 2) 鉄板が張られた大箱には、まだ目録作成の済んでいない文書が入っています。ただし、全ての文書は紙製の袋の中に収納されており、それぞれの袋には中身が記載されています。出生記録やそれに類した記録（死亡記録含む）などがありますが、それらは、キリスト教徒の子孫のみでなく、白杵のすべての住民に関する史料です。さらに、戦

¹ 1933年9月15日に教皇庁代理に任命されたパオロ・マレッラ（Paolo Marella）猥下の後任として。

² 当時任命されたばかりであったブラスコ・ランツァ・ダイエタ（Blasco Lanza D'Ajeta、1907-1969）氏。

前に写された大分（府内）の古地図も入っています。

- 3) 中くらいの箱の中には、鉄板が張られた小箱が二つ収められており、それぞれにマレガ神父の著作に使用された史料が含まれています。また、報告書 665 番に示された書籍、すなわちジョセフ・シブタニ（Joseph Shibutani）神父が準備した日本語資料（*Introductio in Sanctam Scripturam* および *Archaeologia Biblica*）も同封されています¹。」

1953年12月18日、モンティニーニ猯下は、当時バチカン図書館館長であったベネディクト会士アンセルモ・M・アルバレダ（Anselmo M. Albereda）氏に送った手紙のうちに次のようにしたためています。「東京の教皇公使より、さまざまな文書が同封された三つの箱が送られてきました。猯下のもとに送り届けられるよう、準備しておきます。」

12月23日、アルバレダは返信します。そこで、件の3つの箱がバチカン図書館に無事届けられたことを伝え、また「文書と書籍とをバチカン図書館の蔵書のうちに配架するためのしかるべき手続きを行った」と述べています。

以上の史料群に関連して、1954年4月3日および5日、教皇公使マクシミリアン・ドオ・フルステヌベルグはアルバレダ氏に手紙を書き送っています。そこには、『豊後切支丹史料』第1巻²に加え、マレガ神父が教皇公使に送付した手紙の抜粋が添付されていました。抜粋は次のようなものです。「イタリアに送付された史料を印刷した日本版書籍の第1巻についてですが、これを貴殿にお送りすることを東京にて約束しました。この書籍には、使用された史料一つ一つの目録番号が振られています。また、これとは別にお送りする書籍の中には、各ページに使用された史料の目録番号を手書きで添えました。こうすることで、ローマにて原書の閲覧を望む者が、それぞれの文書が印刷されている箇所を特定することができるようになるでしょう。私は、既にこの書籍のイタリア語版も用意しているのですが、これを『ラテラン年報』に送付して出版してもらうか、直接バチカン図書館にお送りするか、決めかねています。」

館長アルバレダ氏は5月15日に返信し、彼の心遣いと熱心な働きぶりについて感謝の意を伝えています。ところが、マレガ神父の質問に対しては困惑した様子がうかがえます。というのも、アルバレダ氏が述べるには、「その書籍の刊行については、まだいかなる情報も届いていない」というのです。

こうしたやり取りの最後に、フルステヌベルグ猯下は、1957年12月6日付の手紙と『島原の乱』（1637）という題名の著書を、アルバレダ氏に送っています（アルバレダ氏は、1958年1月31日、フルステヌベルグ猯下に返信し、同時にマレガ神父にも謝状を送っています）。フルステヌベルグ猯下曰く、『島原の乱』は事件に巻き込まれた一人の侍によって語られたものです。この書簡はその後、当時バチカン図書館の司書を務めていたドメニコ会士マリー＝イヤサント・ローラン（Marie-Hyacinthe Laurent、1906–1968）の手で、

¹ 長崎 1951 年と 1852 年、それぞれ R.G.Bibbia. V.1254,1255 の整理番号にて受け入れられた。

² 1954 年 5 月 18 日に Riserva.III.74 の分類番号にて受け入れられる。表紙にはマレガの自筆のメモで「オリジナル史料はローマにある」とみられる。

バチカン図書館の蔵書に加えられることとなります（整理番号は *Vat. estr. or. 57* でした）。そのことを示すのは、ローラン氏の手によって書簡の余白に書き添えられたメモです。そこには、1957年6月18日と、日付が振ってあります。

マレガ神父によって蒐集された史料の膨大なコレクションは、整理を待っている間、一時的に保留されていました。ところが数年後、その保留状態はより安定したものとなって膠着してしまい、1964年12月まで図書館の中で眠っていたのです¹。1965年に整理されていない史料の調査が行われ、上述のローラン神父がいわゆるケース A を作成しました。それ以降、マレガ神父の史料はそっくりそのままの配置を保って忘れ去られてしまいました。そして、47年の歳月を経た2011年3月、マレガ文書はついに甦ることになったのです（21袋への収納はその時になされました）。

¹ Cp. P. Vian, *Il Dipartimento dei Manoscritti*, in , pp. 383, 387

第Ⅱ報告 マレガ神父収集文書群の魅力を保存し伝える —調査方法と進捗状況の紹介—

松井 洋子（東京大学史料編纂所）

パシーニ館長、プロヴェールビオ氏のご報告では、マリオ・マレガ神父が蒐集した史料をバチカンへ送り、それが 21 袋として保存されるようになった経緯、そして今回の調査プロジェクトが発足した経緯等についてお話をいただいた。私の報告では、現在バチカンに保存されているマレガ文書 21 袋の外見を紹介するとともに、このプロジェクトでは何をめざし具体的にどのような調査を行なっているのか、この 9 月に行われた調査の進展状況も含めてお話ししたい。なお、史料の性格、内容については、次の佐藤館長の報告でより詳しくお話しいただくことになっている。

1 マレガ文書

1.1 マレガ氏の日本研究と『豊後切支丹史料』

マレガ氏はサレジオ会の神父であるとともに、『古事記』のイタリア語訳や、『忠臣蔵』などの物語の研究をした、イタリアにおける日本研究者の先駆けでもあった。そしてもちろん、キリシタン研究の世界では、『豊後切支丹史料』正・続の 2 冊の史料集によってよく知られている。この 2 冊の史料集は、これまで同地域のキリシタン研究が依拠してきた根本史料である。今日も出席の村井早苗先生の著書はじめ、研究者によって利用され、また『大分県史』『臼杵市史』などにおいても、多く引用されてきている。

マレガ氏の蒐集品としては、日本に関する木版本・写本・錦絵などがローマのサレジオ大学に存在し、また豊後地方のキリシタン関係史料がバチカン図書館に存在している。蒐集品は、その物自体の貴重さとともに、マレガ氏がどんな史料を集め、何を研究したかったのかを示すものでもあり、蒐集の全体像の把握も重要な課題の一つとなる。

1.2 史料群の（モノとしての）全体像

マレガ文書は、全部で 21 袋に分けて保存されてきた。これは、先ほどの話にあったようにバチカンにおいて保存のための手当てがなされた部分もあるが、基本的にはマレガ文書がバチカンに入った時の姿を残しており、マレガ氏が作ったまとまりに基づくものと考えられる。現在各袋は A1 から A21 の番号で呼ばれており、我々の調査もその単位ごとに、A1 から順に行っていくが、それはマレガ氏が本来つけていた順序とは関わらず、むしろバチカンでの整理の便宜上のものと思われる。

2 マレガ・プロジェクトによる調査とは

2.1 調査全体のめざすもの

調査は、以下のような工程を含む。

- ①概要調査： 番号を付与する 概要調査票の作成 物品としての登録
- ②保存措置： 封筒に入れる 撮影に耐えるよう修補 今後の保存方法の検討
- ③全点撮影： 保存と公開のための高画質のデジタル画像の蓄積

- ④一点目録作成： 史料一点ごとの基本的情報の蓄積
これらを終えた後、最終的には次のことが目標となる。
- ⑤目録と画像の公開： データベース化した目録、画像を見られるようにする
- ⑥適切な保存と研究の進展： 将来にわたって史料が伝えられ、研究が進む

2.2 調査の特徴

- ①史料群がたどってきた過去の経緯を反映する今の状況を記録に残す＝現状記録にはじまり、今ある史料を将来に残していくための保存措置の検討まで、過去から未来までを視野に入れて今ある史料群全体を生かすことをめざすこと。
- ②調査はバチカン図書館、国内諸機関（国文学研究資料館をはじめとする人間文化研究機構の諸機関・東京大学史料編纂所・大分県の諸機関など）に所属する国内研究者、イタリア人の研究者、イタリアにいる日本からの留学生、など多くの方々の協力を得て、行われている。国際国内協力による調査であること。
- ③目録のデータベースと史料のデジタル画像を公開することを最終的な目的とする、成果を広く社会に還元することをめざすこと。

3 2013年～2014年の調査

2013～2014年の調査は、①概要調査を中心に行なわれた。概要調査が終わったところから、バチカン図書館側による②登録と保存措置、③全点撮影が開始されている。

3.1 概要調査の流れ

- 1) 史料の取り上げ：現状記録写真を撮りつつ梱包を解体し史料を取り出す
- 2) 史料番号の付与：包み紙や紐、同封のメモなども含め、元の姿を反映した番号を付ける
- 3) 容器への収納：番号を記入した封筒・紙等に史料を収める
- 4) 調査票の作成：番号毎に史料の形態、言語、大きさ、虫食いや破れなどの保存の状態、マレガ番号を初めとするメモの有無など、内容ではなく史料の状態を記録する
- 5) 登録簿への記載と保管：史料そのものに番号を付け、登録簿に記載し、ケースに保管
- 6) 調査写真撮影：概要目録の作成、保存措置のために必要な写真を撮る

3.2 「解体」と現状記録

将来にわたる保存・管理・利用のためには、今まであった姿をそのまま保存することは必ずしも適切ではない。しかし、今ある姿には、これまで史料が辿ってきた経緯の痕跡として意味がある。もともとどのように保存されていたのか（e.g.白杵藩の文書袋）、マレガ氏がどのような見方で史料を検討・整理したのか（e.g.分類 メモ）、どのように日本から送られ、受け取られ、扱われたのか（e.g.マレガ氏以外によるメモ等）、などの情報が、今の姿から読み取れるのである。そこで必要なのは、必要に応じて今の姿を復元できるように、現状の記録を残すことである。そのために、今の姿を変える際に、その経過を写真に残し、元の姿を反映した番号を付ける。

3.3 進捗状況

2013年度調査

- ・2013年9月16日～20日（5日間）9名が参加、A1、A2、A3途中まで終了

2014年度調査

*2014年6月9日～13日

- ・保存措置（②）のための打ち合わせと調査（2名〈青木・金山〉とバチカン側スタッフ）
- ・これに基づいてバチカン図書館の保存修復のチームが、撮影前に必要な手当てを始めている。

*2014年9月8日～26日（15日間）

- ・前半・後半に分かれ20名が参加、現状記録はA12まで終了し、A13の途中まで、調査票作成はA11まで終了した。

*本格撮影③の開始

- ・バチカン図書館は、数多くの貴重な資料を所蔵しており、それらの撮影を行うために、大きな資料も撮影できるデジタルスキャナーを備えた写場を持っている。
- ・今回のプロジェクトでは、この写場を使って、一点一点の史料をセットし、イタリア側の専門家がスキャニングを行なう。
- ・今回は初回であるため、双方が立ち会って綿密な協議を行ないながら作業を開始した。
- ・今後も適切な撮影を続け、また問題点があった場合連絡調整に当たるため日本人の立会者が必要になる。それについては、今回の調査に参加して経験を積んだ留学中のイタリア語のできる日本人大学院生の協力を得ることになっている。
- ・高画質で撮影された一枚一枚の画像には、概要調査で決めた番号、その中の何枚目の画像にあたるかなどの情報が付与されている。

3.4 調査済部分についての紹介

*21袋の中にも、少なくとも3つの段階のものがあつた。

- 1) 「豊後切支丹史料」（正・続）の出版に関わるもの（A1・A2）
- 2) マレガ氏によるスタンプや整理番号が記され、ある程度の仕分けがされ、新聞紙等に包んで分類されているもの。整理の程度は、単に番号が付いているだけのものと、内容等に関わるイタリア語のメモが一点毎に付いているものがある。（A5～A11）
- 3) マレガ氏が入手した後十分に整理・研究するに至らなかったもの。（A3・A4）

*以下時間の許す限り、それぞれのグループの特徴を紹介したい。

★A1・A2：「豊後切支丹史料」（正・続）の原稿や収載した史料の一群と考えられる。

→史料集出版後に原史料と突合せの作業をおこなったらしい。

A1・茶色の封筒に分けて入れられ、青鉛筆で年代記入

- ・一部は一緒に入っていた『続豊後切支丹史料』目次に記入された赤青の鉛筆書きと照応

A2・3つの灰色の模様のある文書箱と白い紙包み1つ

・3つの文書箱には、A1と同様、こちらは「豊後切支丹史料」（正）の方に収録された文書が封筒に整理された形でまとめられている。

- ・白い包みの中は「原城記事」（上中下）「有馬陣記集」「島原天草日記」「邪宗門之儀に付内

密申上之書付」などの写本であった。キリシタンと関係の深い島原の乱についての色々な写本を集めている点で興味深い。

★A3・A4：マレガ氏が入手した後十分に整理・研究するに至らなかった史料

二つともほぼ同じ洋服店の箱を利用している。マレガ氏による番号付、個別の史料についてのメモ等はみられない。宗門改の実施、類族の死亡・出生・移動、剃髪等について臼杵藩の宗門方に報告した文書が中心である。類似の文書が束ねられており、宗門方の蔵などに収納されていたものかと思われる。A4の中には一部、水濡れなどによって圧着してしまい、開くことが困難なものも見られた。

★A5～A11 マレガ氏によるスタンプや整理番号が記された史料。

A5：A5は、簿冊のくくりや一紙類を重ねたかたまりが新聞に包まれていた。4つのかたまり。史料の内容は、正保3年の宗門改め強化（佐藤報告参照）に関わるものなど。

A6：一紙類を重ねたかたまりが新聞に包まれていた。2つのかたまり。「きりしたん(宗門)御改に付起請文前書之事」（キリシタンでないことの誓約書）をまとめたもの。

A7：一紙類を重ねたかたまりが厚めの紙に包まれていた。9つのかたまり、史料の内容は、類族の結婚、養子縁組、移動、剃髪等についての宗門方への報告等。

A3・A4と類似した内容であるが、A7はマレガ氏によるスタンプや整理番号が記されていた。村の文書に檀那寺の文書が巻き込まれているものが多い。

A8：一紙類を重ねたかたまりが束ねられていた。6つのかたまり。藩士が宗門方に宗門改の報告をした「切支丹宗門御改に付御書物之事」をひとまとめにしたものを中心。

A9：一紙類を束ねたもの、2つのかたまり。内容は類族の出生、死亡等の届。

A10：3つのかたまり。藩士の家中についての「宗門御改に付家内人数之覚」（宗門改めの基礎情報となる藩士の各家の人数の届）などを貼り継ぎ、さらに集計した簿冊と一緒に綴じ合わせたもの。これは撮影の際には一度綴りをほどく必要があるが、それは来年度以降の作業になる。一方、「宗門御改に付毎月仕上五人組御書物、生死出入之覚」（宗門改めの基礎情報となる人数の増減についての毎月の報告）という堅帳の右側の綴り部分を切断したものが、70冊ほど見られた。おそらく月毎の記録を一年分取りまとめた後不要になり、再利用のため切断したものか。他に綴じたまま習字の練習等に利用した形跡もある。そうしたのものにもマレガ氏によるスタンプや整理番号が記されていた。

A11：2つのかたまり。A10と同様の切断した堅帳、完全な堅帳も数点含まれる。他は生死出入等に関する届書。

⇒ほぼ半分の概要調査が終わった段階で、2袋を除いて9袋については、マレガ氏が番号を付けある程度の整理をしていることが改めて確認された。今回の調査でも京都外国語大学のヴィータ先生、ローマ大学のデルベネ先生、そしてプロヴェールビオさんによっていくつものイタリア語のメモから、マレガ氏の調査研究の過程を垣間見ることができた。今後の調査でも、何をどのように集め整理し、研究しようとしたのかには注目していきたい。

*史料の入手経緯・出所は様々である。予想では村々に保存されていたものが多いかと思っていたが、実は臼杵藩の藩庁に保存されていたと思われるものがかかなり多い。これは今回の発見の一つである。

・藩の宗門方がどのように文書を作らせ、集め、保管していたのか、宗門改めのしくみや文書管理のしくみがわかる。また藩文書の性格から、一部の村のみでなく領内全体につい

での情報、農村ばかりでなく、藩の武士層についての情報も含む。さらに同じ年に提出された史料がまとまって保存されていることで、ある時期の藩全体の状況をつかめる可能性も出てきた。藩の組織や藩士の編制などについても多くの情報を得られると思われる。例えば、各組の中で、何人かが江戸に行っていて不在であること、「伏見常詰」「大坂常詰」といった職が17世紀終わりから18世紀初め頃には存在していたことなどもわかってきた。

- ・キリシタン改めに関わる史料のみの蒐集とはいえ、大量の史料が網羅的に集められていることで、様々な視点からの分析が可能となる。

まとめ

最後に、マレガ文書調査プロジェクトのもたらす可能性について言及したい。キリシタン史、藩政史、地域史といった研究の発展の可能性は当然のこととして、実際に調査を行なって感じたのは、調査プロジェクトを行なうことそのものの持つ意義と可能性である。

①史料の調査・整理・管理・修補などの方法の交流・発展

- ・双方がこれまでに経験している方法について相互に理解を深め、話し合いを重ねながら史料の状況に即したより良い方法を工夫し、その経験を蓄積できること。

②人的交流の発展

- ・すでに今回の調査には国籍・所属・分野を超えた様々な研究者、技術者、補助者が参加している。また、今回のシンポジウムのような形での交流も重ねていきたい。調査プロジェクトをきっかけに、次の世代へも続く人の交流が期待される。

マレガ・プロジェクト 調査参加者一覧

2013年9月 大友一雄・青木 睦・加藤聖文・久留島浩・松井洋子・佐藤晃洋・
シルヴィオ・ヴィータ マルコ・デル・ベネ 調査協力者：阿部愛

2014年6月 青木 睦（国文学研究資料館）・金山正子(元興寺文化財研究所)

2014年9月 大友一雄・青木 睦・西村慎太郎・太田尚宏・加藤聖文・三野行徳
(国文学研究資料館)

松井洋子・佐藤孝之・松方冬子・清水有子(東京大学史料編纂所)

佐藤晃洋・大津祐司（大分県立先哲史料館）

大橋幸泰(早稲田大学)・シルヴィオ・ヴィータ(京都外国語大学)

マルコ・デル・ベネ(ローマ大学)

調査協力者：清水里香・阿部愛・原田亜希子・松浦一之介・マッテオ・ルッチ

バチカン図書館：チェーザレ・パシーニ図書館長

デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ東洋部門責任者

アンジェラ・ヌニエズ保存部門責任者

イルムガルド・シューラー撮影部門責任者

ほかの皆様

第Ⅲ報告 近世豊後のキリシタン禁制史料の発生システムと伝来

佐藤 晃洋（大分県立先哲史料館）

はじめに

大分県内には、中世末から近世にかけて、キリシタン関係の遺跡・遺物が多数遺されている。例えば、キリシタン・南蛮文化交流協定協議会を設立し、地域に残る歴史、文化遺産を活かし、文化と人をつなぎ、魅力あふれる地域づくりに取り組んでいる6市町にある主な遺跡・遺物を抜き出すと、表のごとくである。

1530	大友宗麟、生まれる	大分市	国史跡	大友氏遺跡
1543	ポルトガル人、種子島に漂着			
1549	フランシスコ・ザビエル、鹿児島に渡来			
1551	ザビエル、宗麟の招きで府内に来る	日出町		ザビエル浜出の地
1555	ルイス・デ・アルメイダ、府内に育児院を開設	竹田市	県史跡	キリシタン洞窟礼拝堂
1578	宗麟、洗礼を受ける			
1580	臼杵にノビシアド(修練院)が開設			
1581	府内にコレジオ(学院)が開設			
1582	伊東マンショら、ヨーロッパへ向かう			
1587	宗麟、死去	津久見市		大友宗麟墓
	秀吉、伴天連追放令を発令			
	ペトロ岐部カスイ、生まれる			
	16~17世紀	臼杵市	県史跡	搔懐キリシタン墓
	16~17世紀	臼杵市	県史跡	下藤地区キリシタン墓地
	1612年銘	竹田市	国重文	銅鐘(サンチャゴの鐘)
1612	江戸幕府、伴天連門徒禁令を発令			
1619	加賀山半左衛門・ディエゴ、殉教	日出町		日出殉教公園
1620	ペトロ岐部、ローマに到着			
1639	ペトロ岐部、殉教	国東市		ペトロ岐部記念公園
1660~	豊後崩れ(豊後露頭)			

また、キリシタン禁制下において作成された文書類も、公的機関や個人宅に保管されているものが散見される。そして、現在、バチカン図書館所蔵のマリオ・マレガ神父収集の「豊後キリシタン関係史料」（以下、「マレガ文書」と表記）の調査が進められ、大部分が17世紀以降の文書だと想定されている。

豊後キリシタン関係の研究にマレガ文書が欠かせないことは言うまでもないが、マレガ文書の調査研究に際して大分県下に残されてきた古文書等の史料やキリシタン関係遺跡・遺物を踏まえることも欠かせないとする。総体として研究することにより、キリシタン禁制下の具体的・多角的な検討が可能であるとする。

本報告では、大分県下に残されてきた古文書を含め、マレガ文書の現在までの概要調査の結果を通して、臼杵藩におけるキリシタン禁制に関する文書の作成と伝来について検討していきたい。

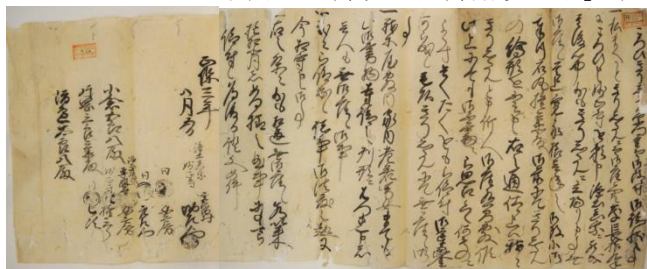
臼杵藩におけるキリシタン禁制政策については、村井早苗氏の研究（『幕藩制成立とキリシタン禁制』文献出版、『キリシタン禁制と民衆の宗教』山川出版社、など）をはじめ多くの蓄積がある。本報告においては村井氏の研究によりながら検討を進めていくこととする。

1. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策開始期の文書

(1) 寛永12年(1635)の文書

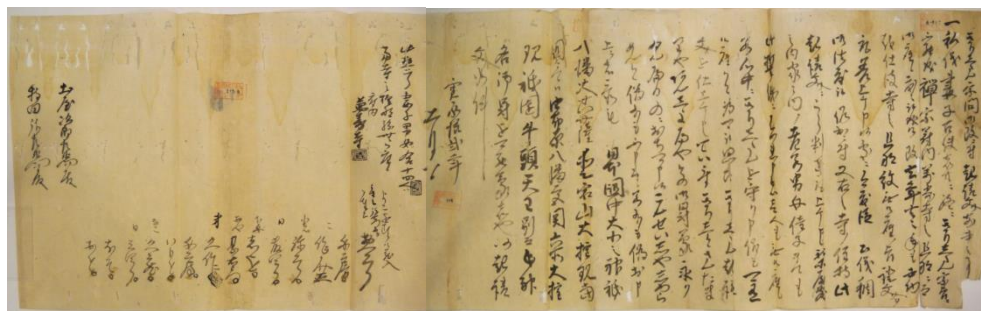
江戸幕府によるキリシタン禁制は、慶長17年(1612)8月6日発令の「条々」の第二条に「伴天連門徒御制禁」が明記されたことに始まる。これを踏まえ、臼杵藩は、高田(大分市)・野津(臼杵市)のレジデンシャに在住していた宣教師たちを追放し、キリシタン禁制に取り組みは始めている。慶長19年(1614)・元和10年(1624)・寛永10年(1633)を中心に多くのキリシタンが転宗している。

正保3年(1646)8月5日付けの「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」(マレガ文書A2.3.1.1)は、かつてキリシタンであった宮河内村(臼杵市)の助左衛門が転び(棄教し)、家族ともどもキリシタンではないことを記し、檀那寺が署名捺印し内容を証明した文書である。助左衛門は、慶長19年(1614)に転び(棄教し)浄土真宗妙正寺(大分市)の旦那となり、寛永11年(1634)に奉行石丸権兵衛の前で「きりしたんの絵形」を踏んで(絵踏)、キリシタンでないことを証明している。この文書によれば、寛永11年(1634)に転びキリシタンを対象として絵踏が実施されたことがわかる。マレガ氏は、この絵踏を「臼杵藩に於ける最も古い記録」としている(『豊後切支丹史料』)。

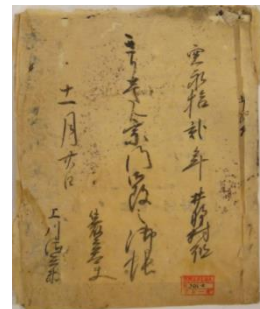


臼杵藩において表面上キリシタンがいない状況となっていた寛永12年(1635)、藩は起請文(「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」)を家内毎に作成させている。起請文に「今度従 公儀稠御法度被 仰出ニ付」とあり、幕府がキリシタン宗門の禁止を厳しく申し渡したことに起因しているといえる。同年11月8日付けで作成

された横尾村(大分市)の惣二郎の文書(マレガ文書A2.4.10.1.1)をみると、惣二郎の家族及び小者、下女、名子等14名は「終ニきりしたん宗旨ニ不罷成(キリシタンになることはなく)」、府内(大分市)の万寿寺の旦那であることを記し各自が確認し血判するとともに、万寿寺が署名捺印し内容を証明している。各自の確認は、惣二郎は署名、書印1人、押印1人、他は「○」印を付している。この文書によれば、昨年・一昨年もキリシタンでないことを記した証文を提出し、檀那寺の証明も付していたことがわかる。寛永10年(1633)から宗門改に際して証文を作成し、檀那寺の証明も付すようになったということである。檀那寺は、旦那14人という人数に間違いが無いことを、人数と寺名の上に捺印し証明している。このような起請文が、マレガ文書A6に約80通含まれている。詳細な分析は今後の課題であるが、特に転びキリシタンの起請文の文面がどのようなものか気になるところである。



この起請文は村組毎に集約され、大庄屋が家内毎に男女別に人数を記し最後に村組の人数と起請文数を集計して「きりしたん宗門御改之御帳」を作成し、藩宗門方に提出している。寛永12年(1635)11月20日付けの井野村組(臼杵市)の「きりしたん宗門御改之御帳」(マレガ文書A2.3.13.1)をみると、内題は「きりしたん御改ニ付起請文人人数ノ御帳」となっており、男女合計583人、起請文数69通となっている。この起請文数は、記載されている家内数と一致している。また、柴尾村組(臼杵市)の「きりしたん宗門御改之御帳」(『豊後キリスト教史』大分県立先哲史料館)をみると、男女合計526人、起請文数(家内数)72通で、男女の合計人数に「男合式百六拾九人、内五人ハ前きりしたん、女合式百五拾七人、内五人前きりしたん」と村組内の転びキリシタンを集計している。



また、起請文や「きりしたん宗門御改之御帳」を藩に提出する際に、各村の庄屋には別に請状(「重而きりしたん宗門御改被成ニ付御請状事」)を提出させている。例えば、寛永12年(1635)12月14日付けの東神野村(臼杵市)の「重而きりしたん宗門御改被成ニ付御請状事」(マレガ文書A2.4.10.2.1)をみると、起請文の内容に間違いが無いこと、



「拾人組」で相互監視することなどが記されている。

このように、臼杵藩は、寛永12年(1635)に、幕府が宗門改を命じたことに基づき、家内毎に起請文を作成させるとともに檀那寺にも証明させ、村組に集約して、庄屋に責任をもって管理させるように請状も提出させたのである。提出されたこれらの文書は、臼杵藩のキリシタン禁制政策の根本資料として宗門方が保存したものであろう。

(2) 正保3年(1646)の文書

島原・天草一揆以後、幕府によるキリシタン禁制政策はさらに強化された。臼杵藩においては、それまでの「拾人組」を「五人組」として再編し相互監視を徹底させるとともに、正保3年(1646)に、キリシタン禁制政策として新たな文書が作成されている。

正保3年(1646)8月16日付けの池原村(臼杵市)1軒と寺小路村(臼杵市)4軒で編成された五人組による「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」(マレガ文書A2.3.3.1)をみると、キリシタン禁制に関して守るべき五項目が記され、5軒の当主が署名捺印している。そして家内毎に檀那寺が署名捺印した旦那である証明を貼り付けている。家内に檀那寺が異なる者がいる場合は、それぞれの檀那寺から証明をもらい、重ねて貼り付けている。5軒目の寺小路村善吉の家内の



場合、2人が戸次（大分市）妙正寺の旦那、4人が野津（臼杵市）普現寺の旦那であると、それぞれの寺が証明している。5軒の家内合計30人の証明となっている。また、この五人組の中には、転びキリシタンが、慶長19年（1614）に転んだ1人、元和8年（1622）に転んだ2人が含まれている。このような「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」が、マレガ文書A5に約100通含まれている。詳細な分析は今後の課題であるが、特に転びキリシタンを含めた五人組の編成の仕方や、村を越えて編成している五人組がどのように相互監視できたのか、気になるところである。

また、同時期に転びキリシタンを対象とした前出の「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」を提出させている。この文書においては、家内それぞれの名前の上方に檀那寺の署名捺印がある。宮河内村の助左衛門の家内では、1人だけ檀那寺が異なっているが、それぞれの檀那寺に持参し署名捺印してもらっている。宮河内村の助左衛門が提出した文書の場合、藩宗門方は「宮河内村ころひ書物 助左衛門」と端裏書きし保管していたことから、提出された書類は転びキリシタンの基礎台帳的な意味をもっていたと考えられる。

正保3年（1646）の「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」と「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」は、臼杵藩がキリシタン禁制政策を再編整備し強化しようとしたものだといえ、五人組制度や寺請制度を考える上でも画期をなす文書だと考えられる。

2. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策確立後の文書

(1) 宗門改に係る文書

臼杵藩では、寛文5年（1665）に宗門奉行が設置され、延宝5年（1677）以降、長崎奉行所より銅版踏絵を借用して領内で絵踏が実施されるようになる。絵踏を踏まえた宗門改が毎年の恒例行事化していくと、毎年ほぼ同様の文書の作成が正月に指示されている。

宝暦5年（1755）の宗門改に関して作成された文書を、丹生原村組（大分市）の「宝暦五年 御触状写」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）より抜き出すと、まず「家内



帳」がある。「家内帳」は絵踏の際の基本台帳となるものであり、前年度分を参考に生死及び婚姻や転居等による出入を踏まえて修正して、家内毎に全ての人名、続柄、年齢、檀那寺を記載し、村毎に集約して作成している。類族の注記もなされている。

「家内帳」に関連して作成された文書に「他領行帳」と「病人帳」がある。絵踏当日、絵踏会場である大庄屋宅に行くことができない者を集約したものである。奉公等で他地域にいる者はその場所で絵踏をすることになることから、その確認のために「他領行帳」が作成されている。また、病気等で自村から動けない者を「病人帳」に集約し、各村を訪問して絵踏を実施するために作成されている。目の見えない者も各村で絵踏を実施していたので、「病人帳」に記載されている。

作成したこれらの文書は、大庄屋のもとに集められ、藩に提出されている。

また、村組では、村組内の生死出入を発生した日毎に記していき、月で村組内の人数の増減を集計し、藩の宗門奉行・郡奉行宛に提出している。類族等に限らず、村組の全て人々の変動を記し報告しているのである。村組にはその写しである「生死出入月払帳」が残されている場合がある。例えば、丹生原村組（大分市）に関して、「宝暦十一年 生死出入御月払写帳」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）などが残されている。「生死出入月払帳」は、「家内帳」を作成する際の基本資料ともなったであろう。



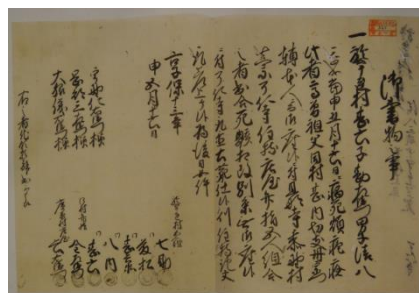
（２）類族管理に係る文書

貞享4年（1687）7月16日、臼杵藩では幕府が發布した「キリシタン禁制覚」について、藩重役を城に集めて申し渡している（「貞享四年 御会所日記下」臼杵市蔵）。特に、キリシタンの訴人奨励、本人・類族等死亡時の取り扱いについて強調されている。これ以降、転びキリシタン本人や本人同然が死亡した際の届け出及びその後の対応について、「御会所日記」に散見される。家老等の協議の場である「御会所」における議題となっていた状況がうかがえる。

転びキリシタン本人や本人同然が死亡してしまっても、類族の管理は続けられている。管理のための台帳として村組毎に「類族名寄帳」が作成され、生死出入等の変動を反映させて書き改められている。丹生原村組（大分市）に関して残っている「類族名寄帳」の一番古いのは、宝暦6年（1756）のものである。これによると、丹生原村組の原村（大分市）には197人の類族が記載されている。

このように記載されていた類族に関しては、出生、死亡、婚姻、養子縁組、転居、出家等の変動があれば、大庄屋は藩の宗門奉行にその都度報告しなければならなかった。特に死亡の場合は、貞享4年（1687）の「キリシタン禁制覚」においても明記されていたように、検死が必要であった。

例えば、マレガ文書A2.3.11.1の「御書物之事」をみると、於牟連村（臼杵市）の3歳の清八の天然痘による病死について、享保13（1728）年5月16日に村から藩の宗門奉行に提出されている。清八の「高曾祖父（曾祖父の祖父）」が転びキリシタンであったため、類族として清八の死亡に関して報告しているのである。村が提出した類族の死亡届は、清八が死亡した事実とともに死骸に特別異常はなかった旨が記されており、村役人である庄屋と弁指、清八の家族が含まれる五人組の連署で作成されている。この文書には、清八の檀那寺である黍野村（臼杵市）の了仁寺の住持が作成した同様の趣旨の文書も添えられていた。類族の死亡に関しては病死であっても、村役人や五人組、檀那寺の住持らによる検視が行われていた。藩の宗門方は、村と檀那寺が提出した文書を、一対の文書として巻き込み、外側の文書の端裏に内容の概要を記して整理・管理していた。このように村や檀那寺から提出され、藩の宗門方が保管していた文書が、マレガ文書A3やA4等に多数含まれている。



大庄屋は、このような報告を提出した記録を「類族諸願日記帳」に写して残していた。



例えば、丹生原村組の原村（大分市）に関して宝暦6年（1756）をみると、死亡5人、出生1人、養子1件、縁組1件、剃髪1人、行方不明1人、合計10件が報告されている（「宝暦六年 類族諸願日記帳」大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）。これらの報告には、類族の死亡については、「御書物之事」と題して庄屋と弁指、五人組の連署で作成されている。他の報告は、「覚」と

題して庄屋が作成している。このような報告様式の違いにも、類族の死亡が特別扱いだっただことがうかがえる。

大庄屋が作成していた文書に「諸願留書」がある。これは、村組から提出された各種報告・願い等の写しをまとめたものである。この中には、村組全体に関するものや各村だけに関するものなど、様々な報告や願いが記載されている。丹生原村組（大分市）の「宝暦六年 諸願留書」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）から原村だけに関するものを抜き出すと、38件の報告や願いが記載されていた。これらの中には、「宝暦六年 類族諸願日記帳」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）に記載されていた10件も記載されていた。また、「類族諸願日記帳」には各人の名前が記載されていなかったが、「諸願留書」には庄屋と弁指、五人組及び宗門奉行の各人の名前が記されている。

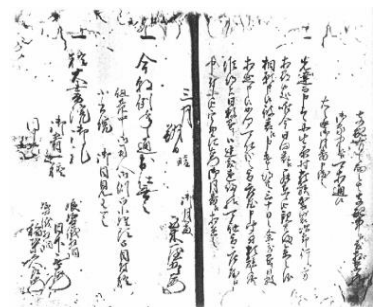
これらの他に、大庄屋は「類族男女生死出入写書覚」を作成している。丹生原村組（大分市）の「宝暦六年 類族男女生死出入写書覚」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）から原村に関する事項をみると、死亡5人、出生1人、養子1件、剃髪1人、行方不明1人、合計9件が記載されている。「宝暦六年 類族諸願日記帳」（大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」）の縁組以外が記載されていることから、村の人数の増減に関する事項を集約していると考えられる。また、記載の仕方をみると、差出や宛先、提出日が記載されていない。

記載の仕方から考えると、大庄屋は提出した文書を全て「諸願留書」に写し、その後類族に関する提出物を抜き出して「類族諸願日記帳」や「類族男女生死出入写書覚」に記載したと考えられる。このように、大庄屋は、基本台帳として「類族名寄帳」を作成して類族を把握し、生死出入等の変動については報告するとともに、数種類の文書に記録していたのである。

（3）「御会所日記」に記された事項

前記のように、家老等の協議の場である「御会所」において議題とされた事項が記された「御会所日記」には、転びキリシタン本人や本人同然の死亡に関する事項が散見される。しかし、転びキリシタン本人や本人同然が死亡してしまっ

以降は、類族に関しては行方不明に関する事項となっている。例えば、宝暦6年（1756）の丹生原村組の原村（大分市）に関する事項を「宝暦六年 御会所日記全」（臼杵市蔵）から抜き出すと、類族の袈裟次郎の行方不明に関する内容だけである。袈裟次郎の行方不明は、2月4日に第1報として大庄屋から宗門奉行に報告された（「宝暦六年 諸願留書」・「類



族諸願日記帳」大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」)。2月15日には、各方面を探したが見つからず、行方不明として届け出ている(「宝暦六年 類族諸願日記帳」大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」)。この後の経過が、「宝暦六年 御会所日記全」(臼杵市蔵)の2月末日に記載されている。袈裟次郎は、日向(宮崎県)で見つかり、連れ戻そうとしているというのである。3月4日、連れ戻したことが、大庄屋から宗門奉行・郡奉行に報告された(「宝暦六年 諸願留書」・「類族諸願日記帳」大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」)。そして、3月18日、袈裟次郎に絵踏をさせたことが、「宝暦六年 諸願留書」・「類族諸願日記帳」(大分県立先哲史料館寄託「池見家文書」)に追記されている。

このように、「御会所日記」に記載される類族に関する事項は、行方不明に関する内容が中心となっている。なお、大庄屋の報告内容は、大庄屋が作成した各種文書の中に記録されている。

むすびにかえて

以上、臼杵藩におけるキリシタン禁制に関する文書の作成と伝来に関して検討してきた。ここで、本報告の概要とマレガ文書のもつ可能性についてまとめておきたい。

臼杵藩は、表面上キリシタンがいない状況になった寛永12年(1635)、幕府がキリシタン宗門禁止を厳命したことを踏まえ、檀那寺による旦那であるという証明が書き込まれた家内毎の起請文(「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」)を作成させた。この起請文は村組毎に集約され、大庄屋がとりまとめて「きりしたん宗門御改之御帳」を作成し、起請文及び庄屋の請状とともに藩宗門方に提出していた。また、臼杵藩は五人組制度を整え、正保3年(1646)、五人組に「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」を作成させ、藩宗門方に提出させた。この文書には、家内毎に檀那寺から旦那である証明書をもらい貼り付けていた。この文書をみると、五人組は村を越えて編成され、相互監視ができるように転びキリシタンを散らばらせていたと考えられる。キリシタン禁制政策開始期である寛永12年(1635)と正保3年(1646)に提出された文書類は、藩宗門方が保管蔵等に保管していたと考えられる。村に写しは残っていないため、マレガ文書に残されている文書がこの時期の研究の根本史料といえる。

キリシタン禁制政策が確立して以降については、様々な形で文書が残されている。大庄屋等が提出した文書の写しとして残したものや藩御会所で議題とされた記録である「御会所日記」などにも、キリシタン関係の記載が散見される。大庄屋等が残した文書には、「家内帳」をはじめとする宗門改に関して作成した文書、「類族名寄帳」や「類族諸願日記帳」等の類族の管理をするために作成した文書等があった。

臼杵藩におけるキリシタン禁制に関する文書としては、一部の村等に残る写しと藩御会所で議題とされた記録以外には、ほとんど文書が残っていなかった。村等から提出され藩宗門方が保管していた文書が、マレガ文書に多数含まれていることから、今後、マレガ文書の調査研究が進んでいくことで、これまで不明であった村々の類族の生活や藩宗門方による提出文書の保管方法等、様々なことが具体的に明らかになると考えられる。

「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 臼杵
バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力

2014年10月29日印刷

2014年11月1日発行

発行 マレガ・プロジェクト

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

国文学研究資料館 大友一雄研究室

©マレガ・プロジェクト（無断転載・複写を禁ず）